

坂崎千春

イラストレーター・絵本作家

Suicaのペンギン (JR東日本)や、チーバくん (千葉県のマスコット)、クウネルくん (雑誌『ku:nel』)などを生み出した、イラストレーター・坂崎千春。ほのぼのとしたキャラクターをつくる彼女のアトリエは、意外にも都心の高層マンションにあった。

撮影 永野雅子

玄関に入るとすぐ、大きなペンギンの置物が目に入る。「知人が作ってくれたものなんです。Suicaのペンギンを手がけてからというもの、ペンギンのグッズをもらうことが、本当に多くなって」。部屋に一歩足を踏み入ると、あちらこちらに置かれたかわいらしいペンギンが、我々を出迎えてくれた。

——こちらにアトリエを構えて、どのくらいになるのでしょうか。

坂崎 今年で10年目ですね。以前は自宅も兼ねていたのですが、今は完全に仕事場として使っています。キャラクターの制作をしていると、グッズやサンプルをたくさんいただくので、手狭になってしまって。キャラクターグッズに追われるように(笑)、自宅は別の場所へ移しました。——うさぎと猫を飼われているそうですね。

坂崎 ええ。動物が好きなんです。子どもの頃は『ドリトル先生』『エ

ルマーのぼうけん』など、動物が出てくる物語をよく読んでいました。スヌーピーのコミックも大好きでしたね。でも、スヌーピーが好きというより、その世界観やストーリーに強く惹かれていました。実を言うと私、昔からキャラクターそのものにはあまり興味がないんです(笑)。

——そうなんですか。意外ですね。

坂崎 だから、自分がこんなにキャラクターをつくるようになるとは、夢にも思いませんでした。もともと絵本が好きで、大好きな動物であるペンギンを主人公にして、絵本をかいていたんです。その本が広告代理店の方の目に留まり、JR東日本のICカード普及のキャンペーンのために使われることになりました。

絵本のペンギンは、顔が小さくシャープで、横向きのポーズがほとんどです。当初、Suicaにもそのペンギンが使われていたのですが、より多くの人たちに愛されるようにと、2003年頃から体をプリッと太らせ、顔を大きくしました。また、キャラクターとしてインパクトをもたせるために、黒い丸顔に目と口だけがある、アイコンのような「正面顔」をつくりました。このあたりから、ペンギンの認知度がぐんと上がったように思

います。

——教科書(『美術2・3上』P32)では、「暮らしの中のキャラクター」と題し、Suicaのペンギンなど坂崎さんのお仕事を紹介しています。

坂崎 キャラクター制作は、私にとって「好きなこと」というより「得意なこと」という感じです。だから、キャラクターをつくるときは、職人のような気分なんです。

「神は細部に宿る」という言葉がありますよね。制作中は、いつもその言葉が頭をよぎります。例えば、ペンギンの輪郭には、温かみのあるブルブルと震えたような線を使うの



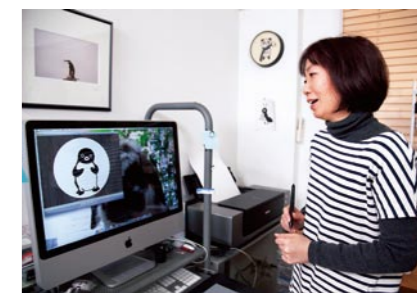
書棚にも、ペンギンのマトリョーシカなど、動物の置物や小物がずらりと並ぶ。

ですが、その細かい「ブルブル」を、納得のいくまで微妙に変えたりします。私以外は誰も気づかないようなことかもしれないけど、そういう細部にも手を抜かず、こだわっていきたい。

この机に向かっているときが、いちばん集中できるし、落ち着きます。昔はキャラクターグッズがあまりなかったもので、もっとすっきりした仕事場だったんですよ。でも、こういう物がたくさんある状態でも仕事に集中できるようになってしまったので、最近はこのままでいいかな、なんて思い始めています(笑)。



2012年秋に長野新幹線と上越新幹線の車体ラッピングに使われたイラストの原画。



「自分でペンギンに動きをつけてみたい」と話す坂崎さん。試作品をMacで見せてくれた。



さかざき・ちはる
東京藝術大学美術学部デザイン科卒業。
ステーションリーメーカーのデザイナーを経て、
1998年よりフリーのイラストレーター・
絵本作家として活動を始める。
2001年、Suicaのペンギンのキャラクターデザインを
きっかけに、多くのキャラクター制作を手がける。
『ペンギンゴコロ』(文溪堂)、
『うさぎのピンゴ』(角川書店)など著書多数。